

絵本にみるジェンダー意識と人間関係に関する研究

—ノルウェーと日本の絵本の比較から—

松田 こそえ*

Gender Roles and Relationships in Children's Books:

Focusing on a comparison between Norway and Japan

Kozue MATSUDA

Abstract

This study aims to clarify trends in Norwegian and Japanese picture books for children by comparing them for gender awareness and to obtain suggestions on gender equality initiatives. The study analyzes a list of 10 picture books for children aged zero to 11 years from a gender perspective —each of these books was included by the International Federation of Library Associations and Institutions (IFLA) in its 2015 catalog.

The main characters in the stories in both countries were boys or animals; few books contained traditional gender-linked modeling. The Norwegian picture books targeted older children by including stories in which characters of similar age conflicted with traditional gender norms, broke stereotypes, and sought to establish their identities. Japanese picture books, on the other hand, contained stories that were liked by all age groups. Many stories were cheerful and their plot revolved around solving of problems— without pronouncing gender norms, a quest for self-establishment, or a search for one's unique identity.

Keywords: gender, children's books, stereotype, Norway, Japan

1 はじめに

本研究は、ノルウェーと日本における子どもを対象にした絵本リストをジェンダー意識の観点から比較することにより、子ども向けの絵本に関する両国の傾向について明らかにし、ジェンダー平等への取り組みについての示唆を得ることを目的とする。

1995年の第4回世界女性会議における北京宣言以来、日本でも男女平等に関する法律整備や行政による取り組みなど、多様な形で男女平等が目指されてきた。しかし人々の伝統的な性別役割のステレオタイプに基づいた意識は依然として残り、2019年には私立大学医学部入試において女子学生が不当に差別される慣習が続けられてきていたことが明るみになり社会で大きな問題となった。一方、北欧ノルウェーは日本と同様に保守的な男性優位の国であったが、1970年以降急速に男女平等社会へと変容を遂げ、今では世界

キーワード： ジェンダー、絵本、ステレオタイプ、ノルウェー、日本

* お茶の水女子大学大学院博士後期課程

経済フォーラムによるジェンダーギャップ指数では、過去 10 年間、常に 1 位か 2 位に挙げられている¹。その変革の過程では、男女平等に関する公平な意識を培うための子どもに対する教育も実施されてきた(松田 2020)。また、Crabb & Bielawski は、男女平等の意識と、子ども時代に出会う絵本やメディアの影響との関わりを指摘している(Crabb & Bielawski 1994: 69)。そこで本研究では、子どもがジェンダー意識を形成する際に影響を及ぼす絵本に着目し、ノルウェーと日本との共通点と相違点について検討する。

本研究の先行研究として、日本とノルウェーを中心に、絵本とジェンダー意識に関する研究を概観する必要がある。まず、日本の絵本とジェンダー意識の関わりについては、藤枝(1983)、藤田(2003)、中川(2001)、西川(2017)、武田(1999, 2000)などによる、分析対象と視点を変えた研究がある。これらにより、日本の子ども向け絵本には無意識に性別役割に基づいたジェンダー規範が表れており子どもの意識に影響を与えると指摘される。さらには、男の子が主人公の絵本が多いこと、伝統的な性別役割分業意識に基づいた登場人物が多いことが明らかにされている。一方で、近年では今までと異なり女性性を保ったままでジェンダーの垣根を飛び越える女性主人公の絵本の増加(谷口 2003)についても報告されている。次にノルウェーの絵本とジェンダー意識の関わりについては、Ingerid (2014)、Kommuneforlaget (2015)、ノルウェー絵本のジェンダー意識や自己の確立に関する内容分析に関しては Maagerø & Østbye (2012, 2017)が論じるなどの研究の蓄積がある。さらに世界の絵本コンクールで入賞した絵本をジェンダー意識やステレオタイプの観点から分析した研究として、Hamilton et al. (2006)、Crabb & Marciano (2011)によるコルデコット賞(Caldecott-award)に入賞した本を分析したもの²、Paynter (2011) によるニューヨークタイムズ(NEWYORK TIMES) でベストセラーとして紹介された英語の本を分析したものなどがある。加えて、幼児が伝統的性別ステレオタイプを培う際の、絵本による影響に触れた研究として、Snyder (2013)、Derman-Sparks & the A.B.C. Task Force (1989)などがあげられる。

このように日本やノルウェー、世界それぞれにおいて幼児のジェンダー意識と絵本との関係を明らかにした研究の蓄積はあるが、ノルウェーと日本との、絵本に関してジェンダーの視点から比較分析をした研究は管見の限り見当たらない。本研究では、共通の選定基準で選出された国際的な絵本リストを用い、子どもが男女平等に関する意識を形成する過程で出会う絵本について 2 か国の傾向を比較する。これにより、国による絵本とジェンダー意識との関わりの特徴を明らかにしようとするものである。

そこで本研究の目的は、ノルウェーと日本における子ども向けの絵本の比較を通し、絵本における 2 か国のジェンダー意識の共通点・相違点について明らかにし、男女平等社会の実現を目指す日本への示唆を得ることとする。

2 分析の対象と方法

分析の対象は、IFLA (国際図書館連盟)「絵本で世界を知ろうプロジェクト」として、世界の 54 の国や地域の図書館司書が選んだ絵本カタログにおける国別のリストである³。これは、毎年実施されているものではなく、2015 年に国際的なプロジェクトとして実施されたものである⁴。『絵本を通して世界を知ろうプロジェクトカタログ』(2015) の巻頭には、プロジェクトの目的として以下のことが書かれている。「各国の図書館司書によって推薦され利用可能な、世界中から選ばれた絵本リストを作成すること」、「世界中の子どもの出版物の言語、文化、品質の高さを促進する方法であること」、「他の国から本を購入したいと考え、各国の『お気に入りの』タイトルを探している国々のため」、及び「パートナーシップの図書館は、彼らの『パートナーシップ図書館』の国の子どもの文学を調査する方法のため」のリストであると示される(IFLA 2015: 8)。IFLA が提示した 10 冊の本の選択基準は、①0 歳から 11 歳までの子どもに適した本、②その国の絵本の中で最も長く続いているか、または長く続き、古典と見なされている本、③選出した国によって出版された本、④選出した国の言語で出版された本、⑤品質が高く、高い水準の文章と挿絵イラストが揃っている本、⑥肯定的なメッセージが含まれている本、⑦子どもに読み聞かせ、または子ど

もと一緒に読むのにふさわしく優れている本、⑩紙に印刷されている本等の10項目である(IFLA 2015: 9)。上記の基準に従い各国の図書館司書が10冊ずつ選んだものがカタログにまとめられ、書名タイトルと作者(文と絵)、表紙の写真、英語による内容紹介が54カ国と地域の名称のアルファベット順に国別に並べられている。本研究では、カタログに掲載されたノルウェーと日本のリストを用い、以下の方法で分析した。

絵本の分類は、絵本におけるジェンダー意識や伝統的な性別ステレオタイプを分析した Hamilton et al. (2006)、武田(1999)と藤田(2003)の分析基準を用い、すべてに共通して使用されている指標を用いて分類した。Hamilton et al. (2006) は、絵本を発行年、タイトル、主人公の種類(人間/動物/その他)と性別、作者の性別、職業、ストーリーにおける主人公の性格や行動の特徴など22の項目により分類した。武田(1999)は本のジャンル(科学/物語/民話)、主人公の性別、作者の性別、主人公の性別や行動に表れるジェンダーイメージ、ストーリーの展開に投影されたジェンダーイメージにより分類し、藤田(2003)は主人公の性別(女性/男性/不明)、職業、作品中の役割(大人のみ)、特徴(形容詞3つ)により分類した。

本研究ではこれらを参考に、リストにある本を①本のジャンル(科学/物語/民話)、②主人公の性別(女性/男性/不明)、③主人公の特徴(大人/子ども/動物)、④主人公の特徴、性格や行動に表れる性別役割分業意識(ステレオタイプ)、⑤ストーリーの展開の5つの基準で分類した。これは、分析対象のカタログにおける情報及び実際の絵本から共通に抽出できる項目である。ノルウェー及び日本の20冊の絵本を、上記の項目により分類し、国別に表にまとめ、分析する。性別役割に関するステレオタイプに関しては、「幼児のためのアンチバイアスカリキュラム」(Anti-Bias Curriculum-Tools for Empowering Young Children)に示された「ステレオタイプワークシート」(STEREOTYPES WORKSHEET)を用いて分類する⁵。

3 ノルウェーと日本の選書リストの概要

3.1 ノルウェーの選書リストの絵本の概要

まず、IFLA(国際図書館連盟)「絵本で世界を知ろうプロジェクト」として、世界の54の国や地域の図書館司書が選んだ絵本リストにおいて、ノルウェーでは以下表1の10冊が選定された。

表1 IFLA「絵本で世界を知ろうプロジェクト」におけるノルウェーの選書リスト

No.	書名タイトル	作者(文)	作者(絵)	初版年度
①	3びきのヤギのブルーセ プールでおおさわぎ [Bukkene Bruse på badeland]	Bjørn F. Rørvik	Gry Moursund	2010
②	ガルマンの夏 [Garmanns sommer]	Stian Hole	Stian Hole	2006
③	オッドはたまご [Odd er et egg]	Lisa Aisato	Lisa Aisato	2010
④	おりこうさん [Snill]	Gro Dahle	Svein Nyhus	2002
⑤	ヨハネスジェンセンはふしぎな子 [Johannes Jensen føler seg annerledes]	Henrik Hvoland	Torill Kov	2003
⑥	ガスとイネ [Gi gass, Ine]	Tore Renberg	Øyvind Torseter	2010
⑦	ともだち [Venner]	Trond Brønne	Per Dybvig	2005
⑧	ヤコブとネイコブ [Jakob og Neikob]	Kari Stai	Kari Stai	2008
⑨	ルッフェンおよげなかつたうみのへび [Ruffen, sjøormen som ikke kunne svømme]	Tor Åge Bringsværd	Thore Hansen	1977
⑩	10まで数えられたヤギ [Geitekillingen som kunne telle til ti]	Alf Prøysen	Vivan Zahl Olsen	1975

IFLA「絵本で世界を知ろうプロジェクト」2015より筆者作成

次に上記のリストに挙げられた10冊を、Hamilton et al.(2006)、武田(1999)及び藤田(2003)による分類の基準を用い、主人公とストーリーの内容について検討したところ、以下表2に表されるようにそれぞれの

絵本の特徴が示された。なお、主人公の性別は、主人公が動物であった場合にもイラストにおける服装や言葉などから男性と考えられる場合は男性とし、いずれの性別であったとしてもストーリーが成立する場合には、性別の区別なしとした。

表2 ノルウェーの選書リストにおける各絵本の特徴

No.	書名タイトル	(1) ジャンル	(2) 主人公 性別	(3) 主人公特徴	(4) 性別役 割分業	(5) ストーリー展開/テーマ
①	3びきのヤギのブルーセ プール でおさわぎ	物語	男性	動物(ヤギ)	なし	小さいヤギの勇気
②	ガルマンの夏	物語	男性	就学前の男子	なし	課題の克服
③	オッドはたまご	物語	男性	小学生男子(卵)	なし	弱点の克服/自分探し
④	おりこうさん	物語	女性	小学生女子	なし	他人との距離/自分探し
⑤	ヨハネスジェンセンはふしぎな子	物語	男性	動物(ワニ)	なし	自分探し
⑥	ガスとイネ	物語	女性	小学生 女子姉妹	なし	冒険/家族愛
⑦	ともだち	物語	不明	動物(うさぎ等5匹)	なし	友情
⑧	ヤコブとネイコブ	物語	男性	男子(2人)	なし	多様性/友情/冒険
⑨	ルッフェンおよげなかつたうみの へび	民話	男性	動物(ウミヘビ)	なし	弱点の克服/多様性/勇気
⑩	10まで数えられたヤギ	民話	男性	動物(ヤギ)	なし	知恵

IFLA「絵本で世界を知ろうプロジェクト」2015より筆者作成

3.2 日本の選書リストの絵本の概要

日本では、以下表3に示した10冊が選定された。

表3 IFLA「絵本で世界を知ろうプロジェクト」における日本の選書リスト

No.	書名タイトル	作者(文)	作者(絵)	初版年度
①	しっぽのはたらき	川田健	藪内正幸	1969
②	かばくん	岸田衿子	中谷千代子	1962
③	だるまちゃんとてんぐちゃん	加古里子	加古里子	1967
④	11びきのねこ	馬場のぼる	馬場のぼる	1967
⑤	ぐりとぐら	中川李枝子	大村百合子	1963
⑥	絵で読む広島原爆	那須正幹	西村繁男	1995
⑦	やまんばのにしき	松谷みよ子	瀬川康男	1967
⑧	だいくとおにろく	松井直(再話)	赤羽末吉	1962
⑨	おつきさまこんばんは	林明子	林明子	1986
⑩	ぐるんぱのようちえん	西内ミナミ	堀内誠一	1965

IFLA「絵本で世界を知ろうプロジェクト」2015より筆者作成

ノルウェーの絵本と同様に検討したところ、表3における10冊の絵本の特徴は以下表4のように分析された。

表4 日本の選書リストにおける各絵本の特徴

No	書名タイトル	(1)ジャンル	(2)主人公性別	(3)主人公特徴	(4)性別役割分業	(5)ストーリー展開/テーマ
①	しっぽのはたらき	科学	なし	動物全般	なし	動物への関心/知識
②	かぼくん	物語	男性	就学前男子	なし	動物への関心/日常
③	だるまちゃんとてんぐちゃん	物語	男性	だるま	あり	身近な日常/知恵
④	11びきのねこ	物語	男性	動物(ネコ11匹)	なし	ユーモア/冒険
⑤	ぐりとぐら	物語	両方	動物(ネズミ2匹)	なし	身近な日常/仲間
⑥	絵で読む広島原爆	科学	なし	不特定多数	なし	歴史/反戦
⑦	やまんばのにしき	民話	女性	やまんば(老女)	なし	郷土愛/勇気
⑧	だいくとおにろく	民話	男性	男性(大工)	あり	郷土愛/勇気/知恵
⑨	おつきさまこんばんは	物語	なし	動物(ネコ2匹)	なし	自然(月)への関心
⑩	ぐるんぱのようちえん	物語	男性	動物(ゾウ)	あり	課題の克服

IFLA「絵本で世界を知ろうプロジェクト」2015より筆者作成

4 絵本の主人公の2カ国比較

主人公の性別は、表2に示されるように、ノルウェーにおいては男性の主人公の絵本が6冊、女性が主人公の絵本が2冊、動物など性別が特定されない主人公の絵本が2冊である。女性が主人公の絵本に比べ、男性が主人公の絵本が3倍と多い。表4に示されるように、日本では、男性が主人公の絵本が5冊、女性が主人公の絵本が1冊、男性女性両方の性別キャラクターが主人公である絵本が1冊、性別が特定されない主人公の絵本は3冊となり、やはり男性が主人公の絵本が半数を占める。これは、絵本の主人公には男性が多いという今までの研究の通りであり、女性の主人公の絵本が男性の主人公の絵本に比べて少ないことはノルウェーにおいても日本においても共通であると考えられることができる。

次に主人公の特徴と年代による違いを比較する。表2と表4に表されるようにノルウェーにおいても日本においても選出された絵本10冊のうち半数の5冊は動物が主人公である。その他はノルウェーでは、男の子が3冊、女の子が2冊であり、大人の間が主人公のものは1冊も選ばれていない。一方で日本は、動物が主人公の絵本が5冊あるのは、ノルウェーと同じであるが、その他の5冊は、男の子が1冊、大人の男性が1冊、大人の女性が1冊、不特定多数が1冊、その他が1冊と、多様なタイプの主人公の絵本が選ばれている点に着目することができる。

すなわち、選ばれた絵本の主人公に関して、ノルウェーと日本においていずれも男性主人公の絵本が多く、動物が半数を占めるといった共通点があった。一方で、主人公の年代や特徴に関しては、動物以外は男の子と女の子の主人公に限定されるノルウェーに対して、大人の主人公を含めた様々な特徴を持つ主人公の絵本が日本では選ばれているということが明らかとなった。

4.1 ストーリーに関する分析(男の子)

次に男の子が主人公の作品(表2②③、表4②)を例に、ストーリーにジェンダーによるステレオタイプがあるか否かを検討する。1980年に発表された『偏見のない教科書と絵本を選ぶためのガイドライン』(“Guidelines for selecting Bias-Free Textbooks and Storybooks”以下バイアスフリーガイドラインとする)では、絵本にえがかれる男の子のステレオタイプとして活動的(Active)、勇気がある(Brave)、強い(Strong)、くだけている(Rough)、統率力がある(Leader)、外で遊び活動する(Playing or working outdoors)等、20項目が挙げ

られている。

表 2②『ガルマンの秘密』は、小学校に上がる直前になっても乳歯が一本も抜けず、水に顔をつけられず、自転車に乗れない男の子が悩み、その課題解決に対して努力し乗り越えるストーリーである。前述のバイアスフリーガイドラインによる男の子のジェンダーステレオタイプには当てはまらない。むしろ逆のタイプの男の子の自立がテーマのストーリーとなっている。表 2③『オッドは卵』は、頭が卵である男の子が頭の殻が割れるのを恐れ、消極的で多くのことから逃げ出すが、ミツバチとの出会いにより強くなり、怖れずに多くのことに立ち向かうようになった結果、卵は割れないほど強い殻になるというストーリーである。このストーリーもまた、男の子のステレオタイプには当てはまらないタイプの男の子である。

日本のリストにある男の子が主人公の絵本は表 4②の『かばくん』のみである。『かばくん』に出てくる男の子は、動物園のカバに興味を持つ。男の子の心の動きよりも、むしろカバの動きの描写に重きが置かれている。この絵本の主人公の男の子も、前述したガイドラインの男の子のステレオタイプの項目には当てはまらないが、逆のタイプの男の子の特徴をみせるわけではなく、むしろ中立的にえがかれている。すなわち 3 冊とも男の子のジェンダーステレオタイプには当てはまらないが、そのストーリーによるえがかれ方にはノルウェーと日本とで違いがあることを指摘することができる。

4.2 ストーリーに関する分析(女の子)

次に、女の子が主人公の作品(表 2④)を例に、ジェンダーの視点からストーリーを検討する。

表 2④の『おりこうさん』は、優等生で目立たない存在の女の子が、良い子でいることに耐え切れなくなり、精神的に壁の中に閉じ込められ、出られなくなる。その後葛藤を乗り越え、自己主張をするようになった結果、鼻の穴に指を入れるような行儀の悪い自分もありのままに表出できるようになり、家族や学校の友達とのより良い関係を築けるようになるというストーリーである。前述のバイアスフリーガイドラインにおいて、絵本のストーリーの中の女の子のステレオタイプとしては、受け身(Passive)、怖がり(Frightened)、弱い(Weak)、気持ちが優しい(Gentle)、きちんとしている(Neat)など 20 項目が挙げられている。この作品は、こういったステレオタイプにはまっていた女の子が自分の殻を打ち破り、自立するまでの過程をえがいたストーリーであると考えられる。Maagerø & Østbye は、この本にえがかれる女の子の成長を分析し、「親や先生から期待されることをする良い子でい続けることに耐えられない状況」と「伝統的なステレオタイプ」からの「解放」されるストーリーであり、「子どもたちが過ごす世界がけっして牧歌的ではない」ことをえがいたことにより、多くの読者の共感を得たと論じる(Maagerø & Østbye 2017: 185-187)。

一方、日本のリストには、女の子が主人公の作品はない。日本のリスト 10 冊の中で唯一女性が主人公の話は、表 4⑦の『やまんばのにしき』である。これは民話であり、主人公の老女の思いが郷土の窮地を救う話である。女の子が主人公の絵本が 10 冊の中に 1 冊も選ばれていないという点が、この日本の選書の特徴の一つであると考えることができる。

これまでは、ノルウェー及び日本のリストにおける主人公の特徴などに着目してきた。次に、リストに挙げられた 10 冊の本を概観し、ノルウェー及び日本の選書の特徴について検討する。

5 ノルウェーと日本のリストにみる特徴

5.1 ノルウェーの選書リストの絵本に見る特徴

ノルウェーのリストに挙げられた 10 冊の特徴としては、以下の三つを挙げることができる。

第一の特徴は、選書を読む対象となる年齢と同じ年齢の子どもが主人公が悩み、課題を解決する姿を示す本が 3 冊選ばれている(ノルウェーの絵本②③④)ことである。Maagerø & Østbye は、ノルウェーにおいて 2000 年以降に子どもの絵本が「哲学的な問いや対話」を提示する傾向が強くなってきたと論じる。つまり「絵本が子どもたちを、生と死、大人になること、年をとること、神、親子関係、動物や自然と子ども

との関わり、友情、倫理的問いなどのトピックについて考えたり不思議に思ったりする世界へと導く」(Maagerø & Østbye 2012: 324)と指摘する。ノルウェーの選書は、この傾向の影響を受けていると考えることができる。また、ノルウェーで選ばれた絵本のうち表2②③④⑤⑨の5冊は、いずれも課題もしくは弱点の克服、自己の確立がテーマとなっており、葛藤と、それを乗り越えることを重視したストーリーである。

第二の特徴として、主人公のキャラクターやストーリーがジェンダーの伝統的ステレオタイプに基づく絵本は選ばれていない点が挙げられる。むしろ、伝統的なステレオタイプにはまらず、社会からのステレオタイプに基づく期待から脱却を試みる男の子や女の子をえがくストーリーのものが3冊選ばれた(表2②③④)。これは、伝統的なステレオタイプにはまることなく自己の確立を促す絵本が選定される傾向があると考えられるだろう。

第三の特徴として、1977年と1975年に発刊された2冊の民話(表2⑨⑩)以外は、初版年度が2000年以降の新しいものが選ばれているという点が挙げられる。ジェンダー平等が高い次元で実現されていると考えられるノルウェーでは、リストに挙げられていた絵本は、男女平等が積極的に目指されていた時期(2000年から2011年)に出版されていた本が多い。また、表2①『3びきのヤギのブルーセーブルでおおさわぎ』は日本でも1965年に発行されて以来ロングセラーを続ける『三びきのやぎのがらがらどん』(ノルウェーの昔話: 訳瀬田貞二 1965)にヒントを得て、2010年に発行された絵本である。民話を選ぶ際も、オリジナル版ではなく、民話をモチーフにした新しい絵本を選定するという点に着目することができる。

5.2 日本の選書リストの絵本に見る特徴

次に日本のリストの絵本に見る特徴としては、次の三点が挙げられる。

第一の特徴として、物語、科学絵本、歴史絵本、民話など多様なジャンルの絵本が選出され、10冊のバランスを重視している点が挙げられる。偏りのない選書を目指したと考えられる。また、年齢層問わず喜ばれる絵本、かつ日本における絵本コンクール入賞作品が多い。これは、IFLAの選出基準の②の絵本の古典と見なされている本という基準を重視し、ベストセラーとして定番の本を多く選んだと考えられる。

第二の特徴として、伝統的なステレオタイプや性別役割分業の概念に基づくストーリーの絵本が少ないという点が挙げられる。日本のリストの絵本の刊行年代は1960年代に発行された絵本が8冊、1980年代が1冊、1990年代が1冊と、ノルウェーのリストの絵本と比較して時期的に古いものが多い。伝統的なステレオタイプに基づく主人公が登場する絵本も多く出版されていた時代ではあるにもかかわらず、10冊の絵本に伝統的なステレオタイプに基づく絵本がほとんど無いという点に着目したい。表4に示されるように、表4⑧『だいくとおにろく』の民話では、大工や鬼は男性であるというステレオタイプを子どもに伝えるものになりうると考えられるが、他の9冊においては、動物が主人公の本が5冊、あとは「だるま」と「やまんば」が主人公ということもあり、ジェンダー意識に関わりがないストーリーである。しかしながら、主人公以外の登場人物に目を向けると、表4③『だるまちゃんとてんぐちゃん』には、お母さんのだるまがエプロンをつけ、お料理をする様子が描かれ、活発な言動が特徴的な主人公の「だるまちゃん」(男)や「てんぐちゃん」(男)に対して、家でままごと遊びをする「だるまちゃんの妹」(女)がえがかれるなど(p. 9)、絵本の中には伝統的なステレオタイプなジェンダー観が垣間見られる。武田は、表4⑩『ぐるんばのようちえん』において、主人公の男の子のゾウがいくつもの職業に挫折した後、子どもと遊ぶ仕事(女性が多い職業)に辿り着くストーリーを、「こどもと遊ぶこと＝育児」なら易しく、うまくできるという女性役割に対する蔑視があると述べた(武田 2000)。しかし一方では、女性にこそふさわしいと思われがちであった子育てと関わる仕事に、男性である主人公のゾウが魅力を感じ、自分にとって適性のある仕事と捉えるストーリーとして、ジェンダー意識の観点からみて肯定的にも考えることも可能である。

第三の特徴として、日本の選書は、自分の存在の意味に向き合い葛藤するといったストーリーの本は選ばれず、明るく読後感がよい本、楽しい本を中心に選ばれている点が挙げられる。『だるまちゃんとてん

ぐちゃん』『ぐりとぐら』『ぐるんぱのようちえん』『11ぴきのねこ』など、ジェンダーと関わりのない動物やだるまを主人公にし、子どもに親近感、共感を持たせ、課題に対して知恵と工夫で楽しく解決するという類の内容の絵本が多い。唯一、表4⑥『絵で読む広島原爆』だけが、実際に起こった戦争の被害を詳細に表現し、読者が牧歌的な子ども時代が送れなかった時代に読者が向き合うことを求めている。

このような3つの特徴により、日本の10冊の選書はノルウェーとは異なる基準で選ばれていると考えることができるだろう。

5.3 ノルウェーと日本の絵本の出版の背景

今までに述べてきた共通点と相違点の背景として、両国の出版事情の違いも勘案する必要がある。マグヌスセン矢部は、ノルウェー語を使用するノルウェー国民が約530万人(2020年)と少なく、ノルウェー語で書かれた本の出版を支えるためには、国による出版買い上げ制度が有効であると述べる(マグヌスセン矢部2013:250)。国がノルウェー語の良書を選定し、ノルウェー語の本の出版と流通を保障することにより、絵本作家は書籍の発行部数の多さを目標にせず、子どもにとって必要と考える本を世に出すことを目標にすることができる。これに対し日本では、国による出版買い上げ制度はなく、出版社も絵本作家も可能な限り多くの人に受け入れられ、購入される本を作る必要がある。その結果として、明るく楽しく、万人受けする絵本が世に流通しやすいという背景があると考えられる。

6 おわりに

本研究は、2015年に世界54カ国(37言語)の各国の図書館司書や図書館に勤める人々によって選定された子ども向け絵本のカタログにおけるノルウェーと日本のリストと絵本を対象とし、両国の伝統的なステレオタイプやジェンダー意識の傾向について論じた。これらの絵本をジェンダー意識の観点から分析したところ、2カ国のリストや選ばれた絵本の共通点及び、相違点が明らかとなった。

2カ国ともに、動物、男性が主人公の絵本が多く、伝統的な性別役割のステレオタイプを読者に伝える本は選ばれていないという点に共通点が見られた。他方、明らかな違いとしては以下の点が確認できた。ノルウェーでは、対象となる読者のうち、年齢が高い読者と同年代の主人公が、伝統的なステレオタイプに縛られずに自己に向き合い、ネガティブな感情に打ち勝つことで、個の自立を目指すストーリーの絵本が比較的多く選ばれていた。一方、日本では、1960年代の出版以降、世代を超え長くて愛される、明るく楽しいストーリーの絵本が多く選ばれている。これは、子どもが大切に守られ、ネガティブな感情に向き合うことなく育てられる存在であってほしいという大人の思いが影響していると考えられる。すなわち、両国の絵本のリストには、ノルウェーと日本におけるジェンダー意識と子どもの存在の捉え方の違いが表れていることが明らかとなった。つまり、ノルウェーでは、子どものジェンダー平等への意識というよりも、男性や女性である前に、まず個を自立させること、子ども時代に一人一人が自立することを目指すことが重視され、一方日本では、ジェンダーや個の自立について意識することなく、子ども時代を穏やかに楽しく過ごすことが重視されると考えられる。

日本は、男女平等社会への変容を目指しながらも、依然として伝統的な性別に関するステレオタイプが根強く残り、子どものころからその意識を変えることの必要性が認識され、伝統的な性別ステレオタイプを表す絵本やマス・メディアの子どもへの影響が危惧されている(西川2017)。本研究で対象とした絵本リストの選定基準の一つには、「子どもに読み聞かせ、または子どもと一緒に読むのにふさわしくすぐれている本」という条件がある。男女平等の観点からみれば、日本も、誰もが楽しめる明るいストーリーの本だけでなく、伝統的なステレオタイプからの脱却や自己との葛藤など、哲学的な問いや対話を要求する絵本を子どもに読み聞かせ、また、一緒に読むことも必要と考えられる。ステレオタイプに基づいたジェンダー意識を公平なものにする必要性や、自己の確立の重要性について、大人と子どもとが語り合うこ

とから、男女平等社会実現への道のりが続いていくのではないだろうか。

本研究は、国際図書館連盟の呼びかけによりノルウェーと日本の図書館司書によって選出された10冊ずつの絵本のリストを対象としたものであり、分析対象が少数に限定されているという研究の限界がある。世界各国から共通の条件で選出された絵本のリストを対象とした点に研究の意義があると考えられるが、分析から導かれる結論は、限定されたものにすぎない。今後は対象とする絵本リストを増やし、より多くの絵本の分析を通して、本研究により得られた知見をもとにさらに詳しく研究を進める必要がある。

註

- ¹ 世界経済フォーラムにより各国の社会進出における男女格差を示す指標(ジェンダー・ギャップ指数)として毎年発表される。2019年には、世界153カ国に順位が付けられた。
- ² コルデコット賞(Caldecott-award)は、アメリカ合衆国でその年に出版された最も優れた子ども向け絵本に与えられる賞であり、アメリカ図書館協会の児童図書館協会(Association for Library Service to Children)が運営する。
- ³ 国際図書館連盟(IFLA)とは、International Federation of Library Associations and Institutions であり、1927年にスコットランドで設立された図書館の国際組織である。現在は160カ国、1600団体が加盟する。
- ⁴ 国際的な絵本のリストとしては、他に国際児童図書評議会(IBBY)により隔年発表されるIBBYオナーリストがある。これは、過去3年以内に自国で出版された児童書から「文学作品」「イラストレーション作品」「翻訳作品」の最も優れた作品を1冊ずつ推薦されたものをまとめたものである。
- ⁵ *Guidelines for selecting Bias-Free Textbooks and Storybooks*. Copyright 1980 by the Council on Interracial Books for Children.を参考にした。ここでは、ジェンダー、民族など多様な偏見に基づくステレオタイプの類型が詳細に述べられている。(Derman-Sparks&A.B.C.Task Force 1989: 141-142)

参考文献

- Crabb, Peter.B. & Dawn Bielawski, 1994, "The Social Representation of Material Culture and Gender in Children's Books", *Sex Roles*, 30: 69-79.
- Crabb, Peter.B. & Deb L. Marciano, 2011, "Representations of Material Culture and Gender in Award-Winning Children's Books: A 20-Year Follow-Up", *Journal of Research in Childhood Education*, 25: 390-398.
- Derman-Sparks, L. & the A.B.C. Task Force, 1989, *Anti-Bias Curriculum: Tools for Empowering Young Children*, Washington, D.C.: NAEYC.
- 藤枝滯子, 1983, 「絵本にみる女(の子)像・男(の子)像」武田京子・木村栄・田中喜美子編『講座主婦1 主婦はつくれる』汐文社, 148-174.
- 藤田由美子, 2003, 「子ども向けマス・メディアに描かれたジェンダー——テレビおよび絵本の分析」『九州保健福祉大学研究紀要』4: 259-268.
- Hamilton, C. Mykol, David Anderson, Michelle Broaddus & Kate Young, 2006, "Gender Stereotyping and under-representation of Female Characters in 200 Popular Children's Picture Books: A Twenty-first Century Update", *Sex roles*, 55: 757-765.
- IFLA, 2015, *The World Through Picture Books: Librarian's Favorite Books From their Country*, Hague: IFLA.
<https://www.ifla.org/files/assets/hq/publications/professional-report/136.pdf>. (2020.11.25 情報取得)
- Ingerid, Bø, 2014, *Kjønnsblind, kjønnsnøytral eller kjønnsbevisst?: Pedagoger møter barn, kolleger og foreldre* [Gender Blind, gender neutral or gender conscious? Pedagogues encounter children, colleagues and parents], Oslo: Universitetsforlaget.
- Kommuneforlaget, 2015, *Større rom for jenter og gutter: Å utvikle en kjønns sensitiv pedagogikk i barnehagen* [More room for girls and boys. Developing gender sensitive pedagogy in day care], Oslo: Leif Askland.
- Maagerø, E. & G.L. Østbye, 2012, "Do Worlds Have Corners? When Children's Picture Books Invite Philosophical Questions", *Children's Literature in Education*, 43: 323-337.
- Maagerø, E. & G.L. Østbye, 2017, "What a Girl! Fighting Gentleness in the Picture Book World: An Analysis of the Norwegian

Picture Book What a Girl! By Gro Dahle and Svein Nyhus”, *Children’s Literature in Education*, 48: 169-190.

マグヌスセン矢部直美, 2013, 『ノルウェーの図書館』新評論.

松田こずえ, 2020, 「保育者のジェンダーバランスに関する研究——1997年から2017年までのノルウェーの保育政策の分析から」『保育学研究』58: 近刊.

中川素子, 2001, 「絵本之力——絵本表現の新たな展開」中川素子・今井良朗・笹本純編『絵本の視覚表現——そのひろがりとはたらき』日本エディタースクール出版部, 155-234.

西川晶子, 2017, 「絵本におけるジェンダー——絵本の主人公性別が子どもの心理発達に及ぼすジェンダー圧力」『信州豊南短期大学紀要』34: 31-55.

Paynter, C. Kelly, 2011, *Gender Stereotypes and Representation of Female characters in children’s Picture Books*, Virginia: Liberty University.

Snyder, L., 2013, “Final inquiry project: Gender bias and stereotyping in picture books.” (<https://www.prezi.com/fowj0erfuoup/gender-bias-and-stereotyping-in-picture-books//2020/2/15> 情報取得)

武田京子, 1999, 「『こどものとも』に表れた性差」『岩手大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要』9: 51-61.

武田京子, 2000, 「『こどものとも』に表れた性差2——性別役割意識と労働観」『岩手大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要』10: 81-90.

谷口秀子, 2003, 「ジェンダーフリーと異形——絵本の中の女性像」『言語文化論究』九州大学大学院言語文化研究院, 17: 29-43.

付記

本研究は、2019年度竹村和子フェミニズム基金の助成を受けて実施致しました。

謝辞

本研究は、クウィーンモード幼児教育大学のカーリ・エミルセン教授、オスロ大学人文社会学図書館司書のマグヌスセン矢部直美氏にインタビューを始め、文献の提供等、貴重な示唆を賜りました。感謝致します。